

視覚障がい者ランナーと伴走者の現状分析（その5）

- 伴走ロープとその役割・意識の調査 -

鈴木邦雄

キーワード：視覚障害 視覚障がい 盲人 マラソン 伴走 ロープ

・目的

視覚障がい者ランナーは弱視者で単独で走れる人を除き何らかの伴走者という助力を必要とし、視覚障がい者ランナーと伴走者を結ぶ重要な存在が伴走ロープである。

しかし伴走方法に特に規定（注1）が無いのと同様に、伴走ロープにも規定は無く、各ランナーが独自の工夫をして作り、その使い方などもそれぞれが編み出した独自のノウハウが存在する。今回の調査は伴走者と一体になる重要な手段である「伴走ロープ」について伴走を必要とする視覚障がい者ランナーと伴走者の両面から調査したものである。

・方法

1) 対象者

全国の視覚障がい者ランナーと伴走者を対象にしたが、筆者が主催する「伴走メーリングリスト」や、その他のメーリングリストなどインターネットが主体になったが、一部は直接お会いして協力を依頼した。

2) 調査方法

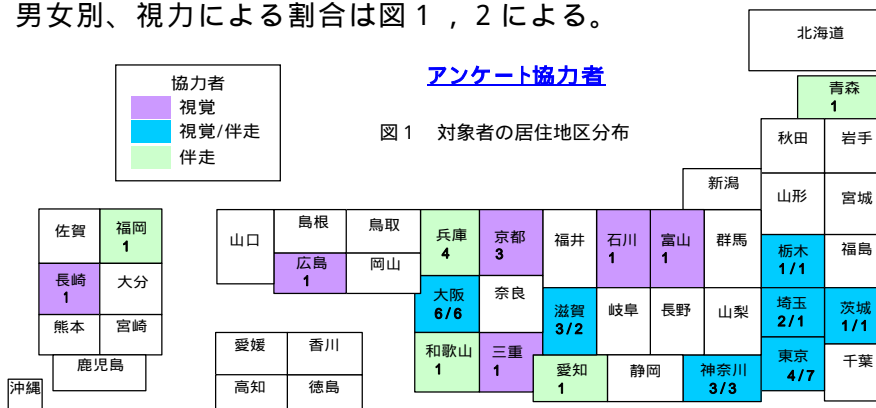
メーリングリストでは協力をお願い投稿を行い、協力する旨をご返事いただいた方に個別にアンケートメールを送り回答してもらう方法をとった。直接対面でお話を聞ける視覚障がい者のかたには筆者が直接質問して代筆し、伴走者のかたには調査票に直接記入してもらう方法をとった。

・結果

1) 協力者の分布

対象者の居住地分布

全国で18都道府県から視覚障がい者30名、伴走者30名の協力を得る事が出来た。その分布、男女別、視力による割合は図1, 2による。



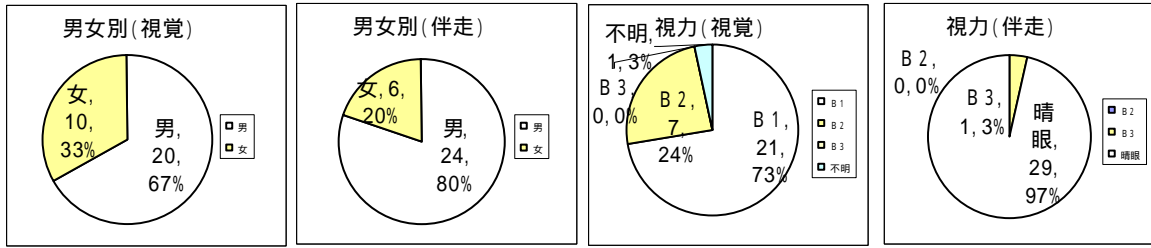


図2 対象者の性別および視力 13 伴走ロープ所持数

対象者の伴走ロープ所持数
 現在所持している伴走ロープの数を視覚障がい者と伴走者の別に集計した。
 伴走ロープの色および長さ
 視覚障がい者の所持する伴走ロープの形状、長さ、色について調査した。
 使用する形態については全員が輪にして使用しているとの結果であった。

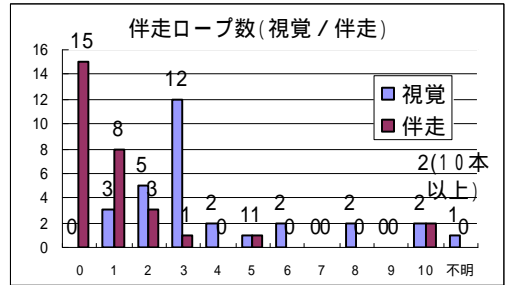


図4 伴走ロープの形状

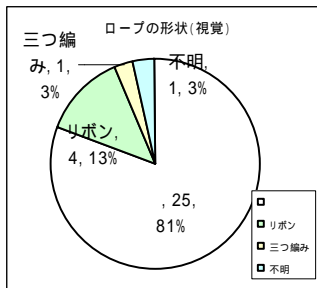


図5 伴走ロープの長さ

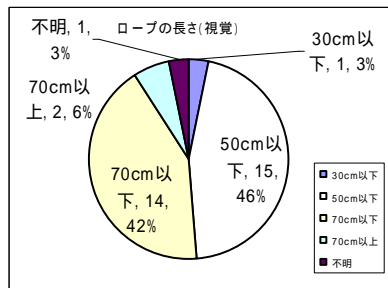


図6 伴走ロープの色

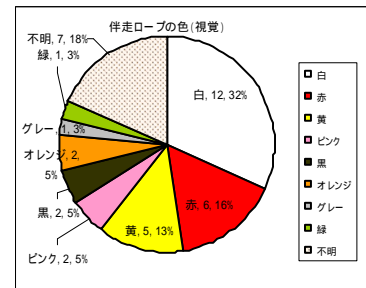
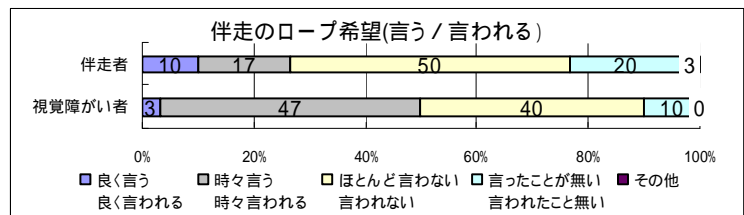


図7 伴走ロープの希望を言う (言われる)

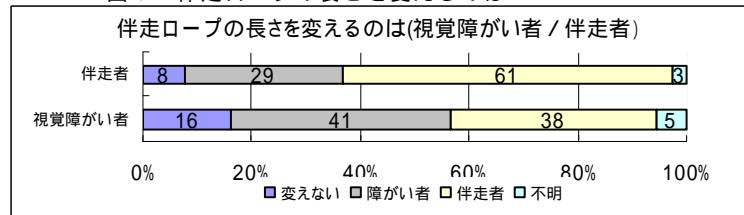
2)・対象者の現状

伴走ロープの状況について伴走者に希望を言うか (視覚障がい者から希望を言われるか) を調査。



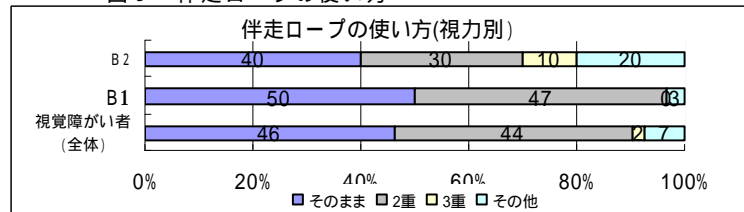
伴走ロープの長さをどちらが変えるか。

図8 伴走ロープの長さを変えるのは



伴走ロープの使い方
 伴走者との一体感を強めるためには伴走ロープは短い方が良いと思われるがその実態について調査。

図9 伴走ロープの使い方



伴走ロープを弛ませて走るか、張って走るかの調査。前項と同様に伴走者との一体感を強めることと、安全上の重要な条件である。

図 1 0 伴走ロープの使い方（張り方）

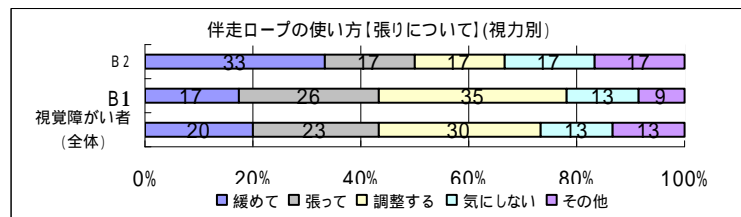


図 1 1 伴走ロープの意識（視覚障がい者）

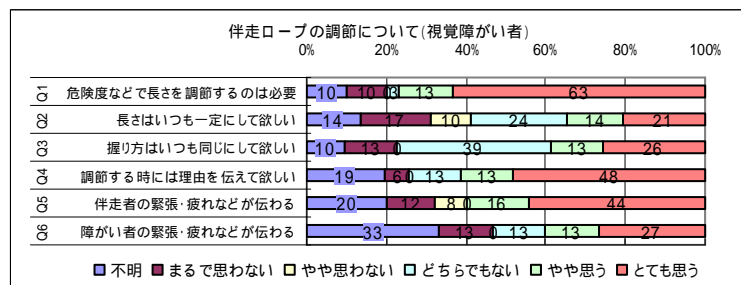
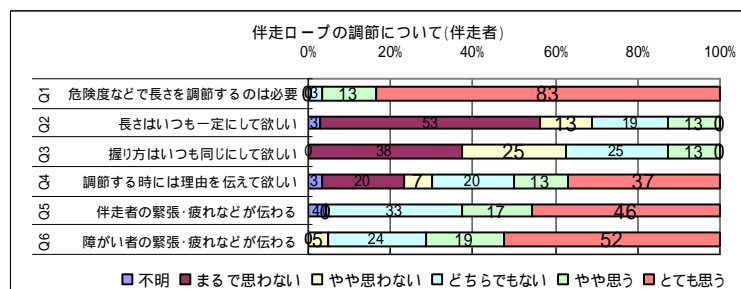


図 1 2 伴走ロープの意識（伴走者）



伴走ロープの意識調査

視覚障がい者ランナーと伴走者が互いにロープを通じてどのような意識を持っているかを調査した。

・考 察

1)・協力者の分布

対象者の居住地分布

インターネットを利用したため全国の協力者からデータを集める事が出来たが、関東圏、関西圏で全体の8割以上を占めた。

視覚障がい者の比率ではB1(注2)(全盲クラス)が70%以上と一般の視覚障害の等級比率の倍近い比率となっている。

対象者の伴走ロープ所持数

視覚障がい者は3本程度所持している人が12人と視覚障がい者の40%を占めており、数多く所持している傾向は少ない。伴走者は所持していない人が50%を占め、1本程度持っている人も約25%ほど存在する。これは伴走者としてのシンボルとして持っているのと、視覚障がい者が忘れた場合などの予備的なものかと思われる。

伴走ロープの形状・長さ及び色

ロープそのものの物理的な状態を調査したが、ほとんど(81%)が丸型のロープを使用し、リボン状の物を使う人が約13%いる。

長さについては30cmから70cmの間の長さを使用している人が90%であった。(輪にしたロープの長さ:競技上の規定では伴走者とは50cm以上離れてはいけないとの決まりがあるが、ロープについては規定は無い)

色については白が一番多く、赤、黄などの順でこの3色で50%以上を占める。

安全上から目立つ色が良いが入手の容易さなどからこのような結果となったと思われる。

2)・対象者の現状

伴走ロープの状況について

伴走者に希望を言うか（視覚障がい者から希望を言われるか）を調査しが、視覚障がい者が「良く言う」「時々言う」を合わせて50%であるのに対して伴走者が「良く言われる」「時々言われる」は25%と半分しかなかった。

また、視覚障がい者から伴走者に「希望を言ったことが無い」、伴走者が「希望を言われたことが無い」がそれぞれ10%、20%存在する。

伴走ロープの長さを変えるのは視覚障がい者か伴走者かの調査

視覚障がい者は「自分（視覚障がい者）が変える」と「伴走者が変える」が約40%前後でほぼ同じ割合であるのに対して、伴走者は「視覚障がい者が変える」と「自分（伴走者）が変える」は29%と51%で大きな差がある。

伴走ロープの使い方

ロープを延ばして使うか、二重・三重に丸めて使うかを調べたものだが、B1ク（全盲クラス）に二重・三重の使用者が多いのかとの想像だったが、B1に二重で使うとの回答をした人が若干多くみられた。

伴走ロープを弛ませて走るか・張って走るかの調査

視覚障がい者全体とB1・B2の差を調べたが、B1では「調節する」が最も多く（危険度などで調節すると思われる）「弛ませて」より「張って」がやや多くみられた。

一方でB2（弱視）では「弛ませて」が「張って」より明らかに多く、少しでも視力がある事により伴走者との一体感が少なくても走れるのではないかと想像する。

伴走ロープの意識調査

「伴走ロープを危険度などで調節する」については視覚障がい者、伴走者ともにほとんどの人が「とても必要と思う」「やや思う」の合計が76%であり「危険度により長さを調節することが必要」と答えている。

長さを変える時には理由も伝えてほしいと61%の視覚障がい者が答えている。

ロープを通じて相手の状況が判るかについては視覚障がい者が伴走者の状況を判ると思うについては「とても思う」「やや思う」の合計が共に60%に対して「視覚障がい者の状況が伴走者に伝わるか」については「とても思う」「やや思う」の合計は40%と低い。

・結 論

伴走者ロープに関しては視覚障がい者、伴走者共に自分が調節しているとの回答だが、視覚障がい者はあくまで自分たちが主体で走っている事が判る。

また、B1クラスの人が伴走ロープを張って走る事も明らかで、視力が多少でも有る事で伴走者に全面的に依存せず走れるB2ランナーの有利さが証明される。

この調査が視覚障がい者ランナーの走る環境向上に貢献出来る事を希望しています。

注1：IPC競技規則及び日本身体障害者陸上競技規則、全国障害者スポーツ競技規則及び解説

注2：B1・B2・B3とは視覚障がい者競技のクラス分けでB1＝視力は光覚までで、どの距離や方向でも（手の形を）認知はできないもの、B2＝手の形を認知できるものから、視力0.03までまたは視野が5度以下のもの、B3＝視力は0.03以上0.1までのものと、視野が5度以上で20度以下のもの